

黙示録2章12-17節 「妥協する教会」

1A 心を突き刺す剣 12

2A 信仰と忠心 13

3A 頑なに偽りを守る者 14-16

1B バラムの教え 14

2B ニコライ派 15

3B 戦われる主 16

4A 隠された命 17

本文

黙示録2章を開いてください、今日は12節から17節まで学びます。七つの教会に対するイエス様の言葉を見て行っていますが、今日は三つ目、「ペルガモンにある教会」に対するものです。私たちは、初めにエペソにある教会に対するイエス様の言葉を見ました。そこには、「愛のない教会」という問題がありました。愛が第一でなければいけないことを教えています。次にスミルナにある教会に対するイエス様の言葉は、「苦しみと迫害に耐える教会」です。ここには、イエス様の叱責がありません、励ましかけです。

そしてペルガモンに対する教会は、14節が大切になります。「けれども、あなたには少しばかり責めるべきことがある。」というものです。少しばかり、とありますね。苦しみの中でも信仰を保っている忠実な教会だったのですが、わずかばかりの妥協があったのです。スミルナの教会においては、悪魔が外からの苦しみによって彼らの信仰を試しました。けれども、ペルガモンの教会は、サタンが教会の内に入って来て、教会が主に対する信仰に妥協の道を取り入れてしまったのです。サタンは、外から攻撃しても無理だと分かれば、中に入って仲良くしようとするわけです。こうした、「妥協」という霊的な危機について、私たちは今回学ぶことができます。

1A 心を突き刺す剣 12

¹² また、ペルガモンにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い両刃の剣を持つ方が、こう言われる――』。

ペルガモンにある教会です。スミルナから約80キロ北にあり、地中海、エーゲ海から内陸に約25キロ入ったところにあります。ペルガモンは、スミルナまたエペソと同じような歴史を持っている町です。ここにギリシア帝国の中で、アッタロス朝と呼ばれるペルガモンの国の首都として栄えました。そしてローマ時代に、その王がここをローマに譲渡することになり、アジア属州の中心的な都市となり、繁栄を続けました。紀元前29年に、皇帝アウグストゥスに献げた宮を建てるのが許され、

それで小アジアの中で、最初にカエサルを崇拝する神殿が建てられました。スミルナの町を前回は見ましたが、スミルナは第二の都市であります。

ここには、驚くばかりの遺跡が今も残っています。基本的にギリシア由来の町は、「アクロポリス」と呼ばれる自然の丘を防壁で固めたところに、神殿やその他の建物が建てられます。そこに、また後世に建てられた大きな神殿、「トラヤヌス神殿」があります。皇帝トラヤヌスを祭ったところです。

そして大きな図書館がありました。エペソにもありましたが、こちらには二十万冊があったと言われ、アレクサンドリアに次ぐ、ローマ第二の図書館です。アレクサンドリアにはパピルスによる本が占めていて、それを占有していました。こちらペルガモンでは羊皮紙によるものが生産されるようになったということです。そして、円形劇場があります。2万4千席を収容するエペソには及びませんが、一万人を収容したそうです。写真で見ての通り、劇場からペルガモンの町を全貌を見ることができるという、絶景です。



Pergamum acropolis from Asclepium

そして、ギリシアの神々の神殿が建てられています。最も際立っているのは、ゼウスの大祭壇とです。今は、その土台の部分しかありません。なぜなら、二十世紀の初めにドイツがその多くを自国に持ち去ったからです。そして彼らは、「ペルガモン博物館」をベルリンに建てました。1930年の事です。後で詳しく説明しますが、その形はまさにナチス・ドイツのヒトラーが演説をしたところにそっくりであり、いや、ナチスがその大祭壇を真似たのです。ゼウスは、ギリシアの神々の中で主神であり、全知全能と言われ、権力や力を表しています。何かにつけてはゼウスに拠り頼むというものでした。



そして、アテナ(あるいはアテーナー)神

殿があります。この女神は、知恵や理知の神であります。何かにつけ、自分が知恵を得たい、知識を得たいとするならば、この女神にすがりに行きました。知識への貪りを満たす偶像です。それから、ぶどう酒の神、ディオニュソスの神殿があります。これは、簡単にいうと「羽目を外したい」という時に行くところです。オカルト的礼拝でありました。強い麻薬を混ぜたぶどう酒によって、参加者たちは恍惚状態に陥ります。乱痴気騒ぎであります。時に、人の命まで取られてしまう程であったと言われていました。

それから、ペルガモンで有名な神殿は、「アスクレピオス」であります。これは医療の神です。この神について有名なのは、蛇の付いた杖です。これは欧米の医療機関ではロゴのような印にまでなっているほど、有名であります。ここが、云わば「医療センター」の役割を果たしており、また、医療や健康に対する異常なまでの拘りも、ここから出ています。いろいろなオカルト的な儀式もありました。夜になって、患者を寝かせてその上に蛇を這わせるであるとか、地下通路を通らせて、通っている患者に叫ぶであるとか、不気味な儀式が含まれていました。アスクレピオスには娘がいて、一人は、清潔と食事への強い執着があり、もう一人には、美と外見への執着があります。今日ある、あらゆる現代的な病はここからむしろ発生していると言ってもよいでしょう。異常な程の潔癖や食事への拘り、また美や外見を異常なまでに駆り立たせる世の中です。

このように、非常に繁栄しており、知的に優れており、しかしながら国の形や文化の隅々にまで、異教の影響がとてつもなく強いという町です。しかし、エペソやスミルナと同じように、こういうところだからこそ、教会が建てられます。ギリシアによってその世界が言語と文化で統一され、そしてローマによって政治的にも統一しました。そして小アジアは、東方の国々とローマをつなぐ中間地点であり、そこにキリスト教会が建てられたということは、ローマ帝国全体への福音宣教が容易くなったということです。ですから、福音宣教においては戦略的でありながら、しかし、キリスト者として生きることは、とてつもない圧迫でありました。

その中でイエス様は、「**鋭い両刃の剣を持つ方**」として現れます。イエス様が使徒ヨハネに現れた一部であります。イエス様の言葉があり、その言葉は人々を突き刺す力を持っているのだ、ということです。「ヘブル4:12-13 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」このように、みことばこそが、魂と霊を分けるまで刺し貫く力をもっており、心の思いやはかりごとを見分けることができるようにするのです。

ペルガモンにある教会には、主に忠実な者たちが多くいた一方で、偽の教えをする者たちがいたのですが、それを許してしまっていました。自分たちは神の言葉をしっかりと守っていましたが、偽の教えをする者たちが一部にいて、それをそのままにしてしまったのです。それで、主がご自分

の御言葉をもって裁かれます。

2A 信仰と忠心 13

¹³ わたしは、あなたが住んでいるところを知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの確かな証人アンティパスが、サタンが住むあなたがたのところで殺されたときでさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。

七つのどの教会にも、イエス様が語られている、「知っている」という言葉です。だれが見ていなくても、主は見てくださっています。「サタンの王座がある。」これは、とんでもない異教の町であったからです。「あなたが住んでいるところを知っている。」とも言われます。これはとても慰められる言葉です。私たちが、文化的に、社会的に、また家庭環境や職場の環境において、とてつもない圧迫を受けている時に、イエス様は、「あなたが住んでいるところを知っている。」と言われます。

「サタンの王座」であります。これがどこを指すのか、いろいろな意見がありますが、主な解釈は、ゼウスの大祭壇です。その祭壇には、銅でできた雄牛の像がありました。その中は空洞になっており、人がその中に入ることができます。そして、そこに人を入れて、その牛の下を火で熱するのです。人心供養です。殉教者アンティパスについて、言い伝えではこうなっています。ゼウスの大祭壇にある、銅の牛の中に入れられたというものです。その中に入って、火によって中が徐々に熱くなり、ローストビーフのように蒸し焼きにされます。そして、その時のうめき声や叫び声を、雄牛の口には少しだけ穴が開いていて、そこからうめき声が出てくるようにさせているのです。

そして、「わたしの名を堅く保って」であります。イエスの名を守るとが、私たちの信仰の骨格であります。イエス様は言われました。「マタイ 10:32-33 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。」イエスの名を告白するということです。これは、悪魔を敵にすることもあります。黙示録 12 章には、「12:11 兄弟たちは、子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに竜に打ち勝った。彼らは死に至るまでも自分のいのちを惜しまなかった。」とあります。イエス・キリストの証しのゆえに、死んでいきますが、竜、悪魔に打ち勝ちます。

「わたしの確かな証人アンティパス」であります。アンティパスは、「全てに反対する」という意味合いがあります。イエス様によって、サタンの座があるところであっても、その全体に反対することであっても、それでも忠実にイエスを証して、死んでいきました。確かな証人とは、忠実な証人という意味で、イエス様が父なる神を示す忠実な証人でありましたが、アンティパスは、すべてに反対しても、イエス様を示す忠実な証人だったのです。

3A 頑なに偽りを守る者 14-16

1B バラムの教え 14

¹⁴ けれども、あなたには少しばかり責めるべきことがある。あなたのところに、バラムの教えを頑なに守る者たちがいる。バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまずきを置かせた。

先ほど話したように、ペルガモンの教会は、基本、忠実な教会でした。けれども、そこに穴が空いてしまっていたとか、いささかの妥協があったのです。それが、「バラムの教え」であります。イスラエルの民がヨルダン川の東を北上しているとき、モアブの王バラクがイスラエルを呪うように、彼を雇いました。主は、彼に行ってはならないと言われましたが、その報酬を愛したのです。それで主は、ろばの口を開かせて、その気違い沙汰を阻まれました。それでバラムは行って祭壇を築いたものですが、呪うのではなく、かえってイスラエルを祝福する言葉を語りました。主がバラムの口を通して、お語りになったのです。

そこで、イスラエルを呪うことは出来ないのですが、バラクからお金が欲しかったのです。「私たちがイスラエルを呪うことができないならば、イスラエルが神から呪われるようなことを行なえば良い」と考えました。そこで彼は、モアブ人の娘をイスラエルの宿営に送り込むようにバラクに助言して、イスラエルの男たちは、モアブ人の娘と不品行を行ない、また彼女たちが持ってきたモアブ人の偶像を拝むようになってしまったのです。そこでイスラエルに神罰が下りました。バラクの思惑通りになったのです。ここにバラムの教えの本質があります。先ほど話したように、外から攻撃ができなければ、内に入って仲良くするということです。そして、主にあって立っているところを突き崩すことによって、神ご自身に滅ぼしてもらおう、ということです。これが、つまずきの石であり、私たち教会にとって、大きな挑戦であります。外からの圧迫は耐えらえても、それを支える内なる力が、妥協によって壊されてしまうことなのです。

ペルガモンの教会の中に、「偶像礼拝や淫らな行いは仕方のないことだ。」とする教えが入って来たということになります。それらのことを行なっても神に対して罪にならない、という教えです。文化や社会に対して、真っ向から対立するようなことにならないように、譲歩して、和合しようということなのです。しかし私たちは、キリストによって聖めを求めるように命じられていますね。「エペソ 4:17-21 ですから私は言います。主にあって厳かに勧めます。あなたがたはもはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。18 彼らは知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、頑なな心のゆえに、神のいのちから遠く離れています。19 無感覚になった彼らは、好色に身を任せて、あらゆる不潔な行いを貪るようになっています。20 しかしあなたがたは、キリストをそのように学んだのではありません。21 ただし、本当にあなたがたがキリストについて聞き、キリストにあって教えられているとすれば、です。真理はイエスにあるのですから。」

2B ニコライ派 15

¹⁵ 同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを頑なに守っている者たちがいる。

ニコライ派は、「人々を支配する」という意味合いのある教えです。霊知と呼ばれているもの、霊的な知識があると言われるグノーシス主義のような異端であったのかもしれませんが。エペソの教会は、この教えを憎んでいました。けれども、ペルガモンの教会には、一部にこの教えを頑なに守っている者たちがいます。いかにも霊的であり、知的であり、もっともらしく聞こえ、偽りの教えを受け入れない人々を見下していくような存在、ただ福音を信じる人々を周縁に追いやるような存在であります。このように、教会の中に、異なる教えを持っている者たちがいるのはとても辛いことです。しかし、それをそのままにしていると、教会全体が混乱に陥ります。

3B 戦われる主 16

¹⁶ だから、悔い改めなさい。そうしないなら、わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦う。

悔い改めなさい、という命令です。エペソに対しても主は、悔い改めなさいと言われました。私たちが今、圧迫や反対を感じているので、それで真っ直ぐにイエスさまを話せていないということ、また、信仰について誤魔化してしまっていること、そうしたことがあるならば、悔い改める必要があります。そして、もし悔い改めないならば、と主は言われます。エペソにおいては、燭台を彼らから外すということでした、教会があっても、実質的にはなくなる、聖霊のご臨在、主のご臨在がなくなると警告でした。ここでは何でしょうか？「わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦う。」ということであります。彼らに対してイエス様が戦われるのではありません。そうではなく、バラムの教え、ニコライ派の教えを奉じる者たちに主が、御言葉によって戦われるということです。もし彼らが対処しなければ、主イエス様ご自身が対処されます。けれども、その時は彼らが滅ぼされてしまいます。

具体的には、教会においてイエス様が分裂を引き起こすことでしょうか。御言葉に従って、彼らを取り除かれることをすることでしょう。彼らは御言葉の、自分たちに都合の悪いことを避けて語っていたのですが、その避けている御言葉によってイエス様は裁かれます。イエス様は、律法の一点一画も必ず成就すると言われました。御言葉は全てその通りになります。そして終わりの日に、諸国の王たちが一斉に、神とキリストに反抗して、イエス様の口か剣が出て、それらの軍隊がみな殺されてしまうのですが、彼らがそうした殺される方に回る、すなわち携挙にあずかることもできないし、ハルマゲドンの戦いに至るまでに間、その大患難で神の裁きに遭う、ということでしょう。

私たちは、内部を裁くべきであるとパウロはコリント人への手紙第一で話しました。また、自分自身を裁けば、裁かれないとも言いました。共同体にいる者たちとして、何かおかしいことを行なった

り、言い始めたりする人がいる時に、憐れみの心をもってその人が立ち返ることを願うことは、神の命令です。「ユダ 22-23 ある人々が疑いを抱くなら、その人たちをあわれみなさい。23 ほかの人たちは、火の中からつかみ出して救いなさい。また、ほかの人たちは、肉によって汚された下着さえ忌み嫌い、神を恐れつつあわれみなさい。」彼らが救い出されることを願うのであって、「それでも彼らは救われている」という、誤った励ましを与えてはいけません。

4A 隠された命 17

17 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしは隠されているマナを与える。また、白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている。』

イエス様が再び、「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」とあります。これは、教会全体に対して語られている御霊の言葉なのだ、ということです。私たちが個々の信仰生活において、世からの圧迫を避けるためにその一部を妥協していく。また教会が、世からの反対を避けるためにその一部を容認していくことがあります。

教会史において、とんでもないことが起こりました。長い迫害の中で、それでもキリスト教会がローマにおいて広がっていきました。そしてなんと、皇帝自身がキリスト者となりました。コンスタンティヌスです。313年のミラノ勅令によって信教の自由が与えられました。そして、392年にはテオドシウス一世によってキリスト教がローマの国教となりました。私たちは、この国教というものがどうしても分かりません。信仰を持った時から、社会も国も全くの非キリスト教である日本にいます。けれども、自分の信じていることが、政治的な、社会的な力を持っているとしたら、どうでしょうか？国民がイエス様への信仰を持たないまま、形だけでキリスト教徒になった、という人々が大勢現われることは喜ばしいのでしょうか？いいえ、そうではありません。

勝利を得る者に対しての約束があります。イエスを神の御子キリストと信じる信仰者が、勝利者です。彼らには初めに、「隠されている」が与えられます。マナはもちろん、主が日々、イスラエルが荒野の旅をしていた時に天から与えてくださったものです。しかし、それは神の言葉によって生きるためのものであり、イエス様ご自身は、「わたしはいのちのパンです。」と言われました。キリストの内に隠された命のことです。「コロサイ 3:3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。」とあります。たとえ、大きな圧迫があつて、人々から認められないけれども、あなたには隠されたマナがある、キリストにおいて永遠の命を得ているのだ、という約束です。

もう一つは、「白い石」です。この解釈は、いろいろあります。ペルガモンの町の遺跡には、白い石があつて、そこに文字が刻まれています。いろいろな白い石が使われる目的がありますが、

その中で、競技の勝利者が、白い石を宴会の祭りへの入場チケット、無償の食事や競技への入場へのチケットとして受け取るものというものがあります。同じように信仰の勝利者が、天の御国に入ることができるものだ、ということです。そういう解釈も可能でしょう。

けれども私は、聖書の中に石についての預言があり、キリストを指し示している箇所に注目しています。「ゼカリヤ 3:9 見よ、わたしがヨシュアの前に置いた石を。一つの石の上には、七つの目がある。見よ、わたしはそれに文字を彫る。——万軍の【主】のこゝば——一日のうちに、わたしはその地の咎を取り除く。」石はキリストを指しています、そして白いのは清さを示しています。

この方に、「受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている」のです。新しい名とは、主なる神が信仰者に親密な関わりを新たにする時に与えられています。ヤコブが御使いと格闘して、イスラエルという名が与えられました。アブラムが、90 歳になった時にイサクが生まれるとして、アブラハムという名が与えられました。主がこのようにして、個人的にその人との関係を一新される時に、新しい名を与えてくださいます。私たちはキリストに、その新しい名が将来の御国において与えられている、ということです。私たちは、ですから隠れたマナと、誰も知らない新しい名が書き記されている石、キリストを求めて、その中で世に打ち勝ちます。